

職員の海外研修に参加して

○山本遼、後藤伸太郎、中西幸弘

工学系技術支援室 装置開発技術系

1 はじめに

本発表の目的は「海外研修の紹介」であり、今後海外研修を希望する方の参考になれば幸いである。

本年度から事務職員向けの海外研修に技術職員も参加できるようになった。研修の主な目的は、「語学力の向上」と「現地の技術職員との交流及びも加工現場の視察」である。「職員の海外研修」の参加・実施の方法についての紹介と、事例として我々の研修で行った内容・得られた成果について報告する。

2 職員の海外研修の概要・目的・流れ

2.1 概要・目的

表1. 平成28年度海外研修募集

職員の海外研修の大きな目的は「国際化に対応する人材を育成する」である。研修の種類は大きく分けて二つあり、ツアー形式で行うタイプAと自主企画で行うタイプBがある。(平成28年度の行き先等は右図を参照)今回、我々が行ったのはタイプBでの研修である。タイプBでは「チームに最低1名は意思疎通の可能な語学能力を有するものを含むこと」とある。これはタイプAの場合サテライトキャンパス職員など、通訳をして

	渡航国	備考
タイプA-1	カンボジア	・1名単位での推薦とする。 ・参加者の語学能力は不問。 ・訪問先との連絡調整は事業推進課で担当。
タイプA-2	ベトナム	
タイプA-3	フィリピン	
タイプB	各チームにおいて設定する。原則としてアジア諸国を優先とするが、研修内容によってはそれ以外の地域も申請可能。訪問先を本学協定校に限定する必要はない。 (例：本学教員が共同研究を行っている機関、開発協力の実施現場、国際会議等。)	・2~4名のチーム単位での推薦とする。 ・チームに最低1名は、訪問先で意思疎通の可能な語学能力を有する者を含むこと。 ・訪問先との連絡調整は、関係教員等に相談のうえ、出発までに各チームの責任において行うこと。

くださる方がいるが、タイプBだと用意されていないためである。そこで今回は名古屋大学に留学経験のあるKaryawanさんとPaneさんに窓口をしてもらおうと共に、現地での通訳もお願いした。

後にタイプA,Bの紹介を記すが、紹介にとどめた内容である。詳しい内容に関しては下記URLから閲覧できる報告書を参照してください。(職員の海外研修：<http://www.iech.provost.nagoya-u.ac.jp/teacher/training.php>)

3 研修内容紹介 (タイプB インドネシアの例)

表2. タイプB 全体の流れ

5月下旬~6月中旬	研修参加募集 (Bの場合、参加申請の段階でおおまかな行き先を決定)
7月~9月	現地との連絡 詳細な行き先 (訪問機関等)・日程の決定 壮行会
10月	研修実施 出張報告書の作成
12月	全体報告会

研修は、以前名古屋大学に留学していたKaryawanさんの協力の下、企画・実施された。我々の研修の大きな目的は、「海外・外国人に対する苦手意識の改善」である。そのため、各機関で多くの人とコミュニケーション

ョンを行えるように、名古屋大学と全学技術センターを紹介するプレゼンテーションを行うほか、訪問機関(特に学生に近い年齢の方)にアンケートを実施した。また、各機関で働く技術職員と交流を行い、業務・環境・設備についての意見交換も行った。

3.1 現地スケジュール

10/16 (日) 名古屋(中部国際空港)発 ジャカルタ (スカルノ・ハッタ空港) 着

10/17 (月) インドネシア・エアロスペース (飛行機製作所)

10/18 (火) バンドン工科大学 (ITB) 機械航空学科

10/19 (水) インドネシア技術評価応用庁 (BPPT)

10/20 (木) ジャカルタ(スカルノ・ハッタ空港)発

10/21 (金) 名古屋 (中部国際空港) 着

3.2 インドネシア・エアロスペース (飛行機製作所)



図1. インドネシア・エアロスペース

エアロスペースはインドネシア国営の企業であり、主に飛行機の設計・開発・製作を行っている。ここでは民間機だけでなく、軍用機も製作しているため、通常エアロスペースを一般の人が見学することはできない。しかしながら、本研修の世話役をしていただいた Karyawan さんと Pane さんが働く技術評価応用庁とエアロスペースは、設計した飛行機の評価などで関わりがあるため、技術評価応用庁の所長を通して申し入れをしていただき、本研修のために特別に許可していただいた。エアロスペースでは、エアロスペースの業務紹介、施設見学をしていただき、プレゼンテーションを行った。

3.3 バンドン工科大学 (ITB)



図2. バンドン工科大学

バンドン工科大学(以下 ITB)は、1920年に創設され一時インドネシア大学の工学部となった後、1959年に現在のバンドン工科大として設立された。大学院生約5000人を含む約2万人の学生が在籍し、1,200名の教員が指導している(2014年)。ITBはインドネシアを代表する理工系大学で、インドネシアで人気が高く、

かつ入学が困難な大学の一つと言われている。ITB と名古屋大学は学術協定を結んでおり、Karyawan さんの企業とも関係があることから、生産工学・航空力学の先生方に受け入れをしていただいた。ITB ではプレゼンテーション、施設見学、先生方・技術職員・学生との交流、アンケートの実施を行った。

3.4 インドネシア技術評価応用庁 (BPPT)



図 3. インドネシア技術評価応用庁

インドネシア技術評価応用庁(以下 BPPT)は 1974 年に設立された国立の研究機関である。日本の国立研究開発法人産業技術総合研究所(産総研)にあたる機関であり、技術・研究・高等教育省の傘下機関である。研究機関としての機能だけでなく、インドネシア全国約 500 の自治体(州・県・市)が導入する技術等を評価・支援する側面も持っている。本研修で世話役をしていただいた Karyawan さん、Pane さんが所属する企業であり、受け入れをしていただいた。BPPT ではプレゼンテーション、施設見学、職員との交流、アンケートの実施を行った。BPPT 内には様々な部門、関連企業があり、Karyawan さん、Pane さんの部署の他にもいくつかの施設で見学・紹介・交流も行った。

3.5 アンケート調査



アンケート調査は、用意・歓迎された場所や相手ではない人とのコミュニケーションを行うことで苦手意識の払拭や語学力の向上を目的とし、ITB・BPPT で行った（合計 106 人）。アンケートは英語で作成したものを配布し、お礼と名古屋大学のコマーシャルを兼ねて名古屋大学のロゴの入ったボールペンを配布した。また今後大学院・博士号を考えている方や、名古屋大学の情報を求めている方には合わせて FACTBOOK を配布した。

3.6 プレゼンテーション

プレゼンテーションは各訪問機関で行った（計 3 回 各 20 分程度）。発表内容は、日本・愛知県の紹介、名古屋大学の紹介、留学生情報、全学技術センター・工学系技術支援室・装置開発機械系の紹介、製作例など業務の紹介という流れで行った。今回は発表する相手が工学系であることや、自分たちが工学系に所属していることから、製造・航空に焦点を合わせて発表を行った。

4 まとめ

大学の国際化が進む中、職員もそれに対応していく必要がある。そんな中でこのような研修の経験が非常に大切になると感じた。この研修では、漠然としていた語学やコミュニケーションに対する不安などをより明確にし、モチベーションにすることができる。また、海外の大学での組織体系や運営・業務を知ることで自分たちの組織や業務をより客観的に見ることができ、よりよい組織作りにも活かすことができると感じた。タイプ B では企画から自分たちで行うために、準備段階から色々なことを勉強することができるが、訪問したい国に知り合いがない場合、企画することは難しい。しかしながらタイプ A であれば日程や訪問機関も決められており、現地スタッフもいるためにとっても参加しやすい環境であるといえる。今後このような研修に技術職員も積極的に参加し、名古屋大学・日本国内だけではなく、世界を基準としたサービス・技術・環境を知ること、今後の名古屋大学の国際化に貢献できると考える。

5 謝辞

本研修を行うにあたって多くの方々の力添えをいただいていた。職員の海外研修を企画・運営して下さった事業推進課の皆様、アンケートや現地での配布資料等でお世話になった総務部広報渉外課の皆様、Karyawan さん Pane さんをはじめとするインドネシアの皆様、多忙の中、本研修に参加する時間を与えてくださった装置開発技術系の皆様に深く感謝いたします。